

波佐ネット通信

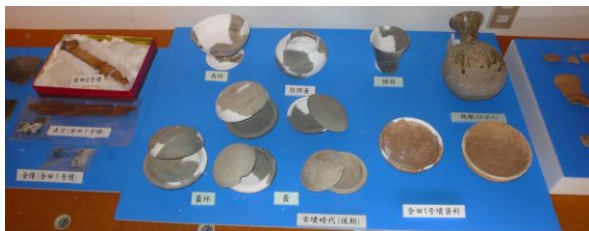
No. 7 2015.4.8

常設展「金城の古代・中世遺跡と山城」

浜田市金城歴史民俗資料館では、昨年の企画展を常設展に切り替えて、引き続き、「学べる博物館」として古代、中世、近世にわたる「たたら製鉄」に関わる変遷の歴史が学べる展示となっております。

縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・南北朝・安土桃山の各時代を通じて金城町内の遺跡から出土した埋蔵文化財を展示解説して、人びとの営みと黒金を巡る攻防の歴史が繰り広げられてきた歴史を紐解く。縄文時代後期から長田郷遺跡周辺では定住化が図られ、弥生中期には、稲作が伝播してきた。古墳時代前期には、千年比丘一号墳では、鉄器を研ぐ砥石が埋納されていた。稲作と同時期に黒金を造る技術や鉄穴流しの技術も伝播したものと考察えさせる遺跡の発見であった。

文献史料によれば「長田別府」、「長田保」、「波佐庄」と国衙・荘園制度があり、大歳神社へ従五位下の河野監物神祇官が派遣され、「墾田永年私財法」に則り、田畑を拡張し黒金を産出して富を貯え、永萬年間には自己防衛のため亀遊山へ波佐一本松城を築城した。築城に当たっては、陰陽道に則り、東北の鬼門除けに大歳神社を移設した、大歳神社から真東に官道を築き細田の地へ役宅を構えた。その後、源平合戦が起こり、佐々木高綱が波佐一本松城主河野氏を打ち破り、八幡宮を営造し仏門へ帰依した。その後、波佐一本松城は、小笠原大学公光が「波佐谷の合戦」で敗退、尼子経久、吉川の所領地を経て江戸時代を迎えた。地下(じげ)農民は、「たたら製鉄」の繁栄によって、馬(103頭)による砂鉄の運搬で農閑期の収入を得た。

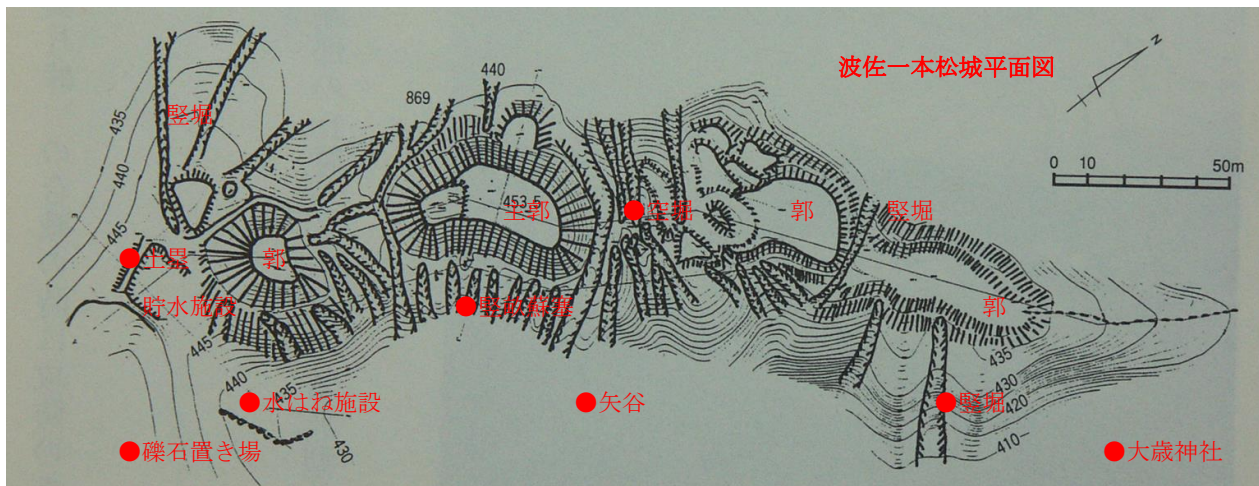


写真左) 金田古墳出土品



右) 千年比丘一号墳出土品

下) 波佐一本松城平面図



浜田市金城歴史民俗資料館(土・日曜日開館)、団体等で平日のご来館は事前予約が必要です。

予約のお申し込みは、TEL 090-4697-2818へお願いします。